

拝啓

秋も深まる中、鈴木康友市長には、ますますご清栄のことと存じます。

突然お便り申し上げる失礼をお許してください。

私は、二〇一一年以来川勝平太知事の下で静岡県の対外関係補佐官の仕事をしている、東郷和彦と申します。

私は、以前外務省に奉職し、その間、仕事のちょうど半分を北方領土問題を核とする対ロシアの交渉にあたってまいりました。二〇〇一年森喜朗総理とプーチン大統領とのイルクーツク首脳会談に参画したあと、翌二〇〇二年外務省を退官し、その後は大使として最後の仕事場となったオランダに戻り、以後外国の大学で学究の道に入り、二〇〇九年より京都産業大学にて国際政治の研究・教鞭に携わっている者です。

静岡県の行政には全くの素人の身であります。対外関係補佐官の職について以来、太古から受け継いできた静岡県の豊かさと、それが未来に向かって有する可能性に深く感動し、微力ながら、県の一層の発展のためにお役にたてればと考へ、今日に至っております。

特に現実の県政について触れさせていただく機会を持ったことは、私にとり本当に大きな学びの連続でありました。なかでも、様々な面で県の産業と文化をリードする県西部の雄浜松の発展は、極めて印象深いものがあり、貴地を訪れるたびにいつも新鮮な驚きを感じておりました。

安倍内閣の下で地方創生が唱えられてからは、「富国有徳ふじのくに」の目標の下で正に地方創生を進めてきた静岡県こそその先頭に立つべき県と確信し、私が静岡で学ばせていただいたことを少しでも日本中に知っていただきたいと考へ、雑誌『エルネオス』に「地方再生静岡モデル」を提唱する投稿をいたしました。僭越ながらここに同封させていただきましたが、その中でも、今浜松で繰り広げられている様々な新しい試みの一端を紹介させていただきました。

さて、そういう状況の中で、六月中旬偶々読むことになった新聞記事によって、浜北区の森岡の家と庭園解体の計画を知りました。これは本当に驚きであり、私がこれまで学んでまいった浜松の印象と如何にしても調和させることのできないものでした。

壊されそうになっていたのは、明治以来の日本文化の結晶であった家とそれを囲む貴重な松や銀杏の大樹でありました。グローバリゼーションと言う、情報が瞬時に世界を駆けめぐると恐ろしい共通技術の時代に、各国はその生き残りのために、他の国には絶対にはない独自の文化を発信しようと、必死になる時代が来ております。そして、日本が発信できる世界のどこにもない豊かな文化には、間違いなく、先祖が現代の日本に残してくれた自然と文化の結晶が入るであらう。

その後度々現地を訪問し、この解体計画に反対する方々の現場の声を何回もうかがうようになりました。森岡の庭園は、鎮守の森として、窒息感のある都市化生活の癒しとなってきました。浜北の地元植木職人にとっては、自分たちの仕事場の象徴として自発的管理によって保存したい場所でした。この地の歴史の深さを発掘して世界に広めようとする郷土史家の誇りでありました。

私としてこの計画を思いとどまっていたくようできうる限りのことをしてまいりましたが、残念ながら解体は開始され、もはや、屋敷はほぼなくなり、残るは最も貴重な松と銀杏その他の木々のみとなりつつあります。

何とかこれらの最も貴重な大樹を残していただけないでしょうか。

駐車場建設は都市計画法の緑化率20%の適用を受けることを知りました。

なんとか、この20%の内枠に、明治以来の日本を創ってきた先輩たちが私たちの世代に残してくれた、この貴重な天然記念物もしくは保存指定の価値のある樹木を残していただけないでしょうか。

私はこれまで浜松発展のために幾多の業績を上げてこられた鈴木康友市長なら、ここで申し上げている事柄の軽重を理解してくださると信じております。

問題は、駐車台数によって人為的に設定される計算需要供給とは全く異次元の、世界に打って出る日本発信のための自然と文化の保存育成にあります。

駐車台数について人知の及ぶ限りの設計と計算をすべきはいうまでもありませんが、それを超える大きな外枠の課題が在ることを、市長ならきっとご理解いただけると信じております。

一度行政手続きがとられたので変えることができないというお言葉だけは、決してうけたまわりたくありません。鈴木市長のように政治を深く経験した方ならよくおわかりになるように、この官僚主義の発想こそ、今の日本をブレーキの利かない惰性国家にしてきました。官僚の世界で長年生活してきた者として、この点身に染みて感じております。

以上どうか意のあるところを御理解いただき、高度の政治判断をいただけるよう、伏してお願い申し上げます。

敬具

二〇一五年十一月六日

静岡県対外関係補佐官
東郷和彦

浜松市長
鈴木康友殿